

# 世界とつながる日本

学 校 名：天理小学校  
名 前：渡辺 道治  
実践教科：社会

指導時数：15 時間  
対象学年：小学 3 年生  
対象人数：37 人

## 1. 教師海外研修を通して感じたこと

プログラムの充実度が極めて高く、管理・運営に携わって下さった方々に深く感謝したいというのが率直な感想である。農業支援、識字教育、伝統織物体験、大学生・小学生との交流、地雷撤去の視察、虐殺生存者のご講演等、大変貴重な視察や交流の場を与えて頂いた。開眼される思いというか、価値観が揺さぶられる魅力的なプログラムが満載であった。

その中で、私は特に「持続可能な開発の糸口を探る」という点に主眼を置いて研修に臨んだ。現地の暮らしを肌で感じ、人々と直に接する体験を通して、その土地土地に合った開発の事例を掴みたいと考えた。わずかな期間ではあったが、アンテナを立てた上で視察・交流に臨む事で得られた学びが数多くあり、授業化したい事例をいくつも発見できたことは大変有難い事であった。

そして何より、8名のチームで研修に臨めたことが貴重な経験であった。事前研修から様々に意見交流をし、現地でもそれぞれの気づき・学びを振り返る中で、自己の学びが何倍にも膨らんだ。素晴らしいチームに出会えたことに、心から感謝している。個人の学びには限界があるが、チームでの学びは無限であることを改めて感じた研修であった。

## 2. カリキュラム

### (1) 実践の目的・背景

本実践を行うに当たり、特に留意したことは以下の2点である。

- ①カリキュラムを、「教科」における学習として位置付けること
- ②実践を通して、知識・技能を身に付けさせること

順に詳述する。

① 開発教育や国際理解教育は、扱う内容や目的の性格上「総合的な学習の時間」（以下「総合」）や「道徳」として位置付けられることが多い。しかし、「基礎基本」を習得することを目的とした新学習指導要領では、「総合」の時数は大幅に削減されているのが現状である。今後も開発教育に取り組み、持続可能な学習として続けていくためには、教科学習といかにリンクさせるかが大切になってくるだろう。そこで、本実践では全ての授業を「社会科」として扱うことにした。指導案には指導要領との関連も明記し、教科の発展学習として本実践を位置付けた。

② 今回最も避けたかったのが、「興味重視」の授業に終始してしまうことである。開発教育の中で、未知の世界や事例と出会う新鮮な感動や驚きは、極めて貴重な学びである。実践する者は、その点について大いに工夫をすべきだろう。しかし、その「興味」や「関心」ばかりに重きを置いた授業に終始することは、「持続可能」な学びとしては不十分だと考える。どれだけ強い興味を喚起しても、それは多くの場合時間と共に熱を失っていく。学習後も、子どもたちが様々な問題の在り方を考えていくためには「ものさし」が必要だ。その「ものさし」として、開発途上国に関する「知識」や、様々な資料を調べたり活用する「技能」を育むことを本実践の1つのねらいとした。

以下、実際に学校で配布した指導案から抜粋し、「実践の目的 / 背景」を細かく補足していく。

## はじめに

連日、ニュースで他国との摩擦が報じられている。尖閣諸島、竹島、北方領土などの領土問題。アメリカ軍の基地問題。北朝鮮の拉致問題等々。そこには、海洋資源をめぐる争いや外交上の利権を得るための思惑などが内包されている。

これらの外交問題は、一朝一夕に解決するものではなく、今後も長く対応が協議されるものである。日本の教師として、これらの問題の本質や、他国とのかかわり方及び他国の文化・歴史について教えていくことは極めて重要な事であると考え。それは、単に問題を解決していただくだけではなく、国際社会の中で互いに理解し合いながら生きていくために必要な教育だと考えるからだ。『新学習指導要領解説』にも、「改訂の経緯」として次の記述がある。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。

児童の発達段階を鑑み、異なる文化や文明を学んでいく一過程を本単元で提案したい。

## 教材について

中学年の社会科は、一言で言うならば「地域」を学ぶ内容である。

地域の産業や消費生活の様子。生活環境及び安全を守るための諸活動。または、地域の地理的環境や地域の発展に尽くした先人の働きについて学ぶ。

その中において、本単元では「海外の地域の暮らし」を調べる学習を取り入れる。自分の身近な地域の暮らしと、海外の地域の暮らしを対比する中で、産業や消費生活についてより深い理解を図りたい。尚、学習指導要領で言えば、次の領域に関わる学習である。

- 地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色及び国内の他地域などとのかかわり
- 「国内の他地域など」については、外国とのかかわりにも気付くよう配慮すること

【小学校学習指導要領解説 社会編】「第三学年・四学年内容の取扱い」より抜粋

「海外の地域の暮らし」の一例として、本単元ではカンボジアを取り上げる。

今回、JICA 関西の教師海外研修においてカンボジアを訪れる機会を得た。その中で、小学校教育における教材としての可能性をいくつか発見した。現在授業化を検討している事例を以下に列挙する。

- ① 持続可能な開発の事例の数々
- ② 日本との深い協調関係
- ③ 地雷や内戦など、大きな負の歴史の爪痕が今なお残っている事
- ④ 東南アジアの植民地支配の歴史
- ⑤ 開発途上国と日本の技術支援

今回の一連の授業では、主に①②③を扱う。

①の「持続可能な開発」は、途上国における開発を進めていく上で最大のテーマの一つであり、先進国の人々においても重要な示唆を与える考え方である。カンボジア国内には、そうした持続可能な開発の事例が数多くある。

② 20年に及ぶ内戦の末、荒廃を極めたカンボジアを1992年からトップドナー（最大の援助国）として支えてきたのが日本である。親日感情は極めて強いものがあり、国内通貨「リエル」紙幣に、日本が作った「橋」が描かれているほどである。また、多くのNGOが教育、医療などで現在活躍し

ており、近年は日本企業も数多く進出している。町の様々な所で、日本の援助の実績を発見することが出来る。

③各国の援助のもと急速な発展を遂げる一方で、国内にはいまだ深刻な課題が残されている。人身売買、地雷、児童労働、貧困、ストリートチルドレン、HIVの問題は極めて深刻で、教育環境の格差も極めて大きいものがある。

これらの内容を包括的に授業で扱う中で、まずはカンボジアに対する関心を高め他国の人々の様子を自主的に調べようとする意欲を育てたい。また、諸々の課題や開発の方法を教えていく中で、カンボジアだけでなく日本の未来や今後目指すべき取り組みについても考えさせていきたい。

## 児童について

3年生として初めて社会科を学習し始め、現在までに「地図記号」「方位」「学校の周りの様子」「お店で働く人々」「物を作る仕事」などを学んできている。授業への意欲は概ね高く、調べ学習の課題を出した際も家で自主的に調べてくる児童が多い。

一方で、資料活用能力や情報検索能力は現在進行形で学習中であり、社会科の学習に応用するには難しい部分がある。最近算数の「表とグラフ」でグラフの読み方を習ったばかりであり、各種グラフやその他の表資料からの読み取りも、かなり難易度が高い課題と言える。また、ローマ字をようやく習い終えたばかりであり、タイピングはほとんどの児童が出来ないため、パソコンによる情報検索も難しい状態にある。

そこで、授業で扱う資料としては「写真」「映像」「実物資料」の3つを主に使用し、そこからの情報の読み取り及び解釈を授業の中心に据えることにした。また、調べ学習を行う際の基本も「人に聞く」「国語辞典で調べる」「百科事典で調べる」の3つに絞り、進んで学習に参加できる「場」や「仕組み」を出来る限り作られるように留意するつもりである。また、必要に応じて、新たな情報の読み取りや検索のツールについても教えていく予定である。

新たな知識に出会い、素直にその喜びや感動を表現できる中学年の特色を最大限発揮できるよう、発表の場や方法についても随時工夫を加えていきたい。

## 指導について

単元全体を通して、以下の三点に留意したい。

第一に、カンボジアの人々が力強く生きる様をできるだけ細部にわたって伝える事である。開発途上国を授業で扱う際、自分の生活と比べて単に「かわいそう」「大変」という印象論ばかりが先行してしまうことがある。そればかりか、結局授業を通してその印象しか残らないケースすらある。偏ったイメージを伝えるのではなく、人々の生活を具体的に細かく伝える中で、力強くダイナミックに生きているカンボジアの人々の生活の「良さ」について考えさせたい。そこには、我々にとっても重要な示唆を与える「持続可能な開発」の視点が多分に含まれているからだ。そのために、強い負のイメージが先行することの無いように、教材を提示する「順番」には十分留意したい。

第二に、資料活用能力をきちんと育てることである。この学習自体を「持続可能」なものとしていくためには、関心意欲を高めるだけでは不十分である。外国に興味があったとしても、「地図が読めない」「方位も分からない」「グラフも読めない」では、根本的な所で他国の事を知ろうとする意欲にはつながらないと考える。指導要領に示されているように、各学年における資料活用能力を線の指導で継続的に扱い、習熟させていく必要がある。

第三に、カンボジアとの協調関係を、具体的な事例を通して教えたい。外国との摩擦が多く報じられる昨今だからこそ、友好関係を築いている諸々の事例を教えていくことには意味があると考えている。

## (2) 授業の構成

## 単元目標

- カンボジアと日本とのかかわりをもとに、日本の海外との関係や未来について関心を持ち、進んで調べ学習に取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- カンボジアの人々の生活の良さや課題について、身近な生活と比較しながら、自分なりの考えを持つことができる。(思考・判断)
- 「貧困」や「児童労働」など、開発途上国における課題を理解することが出来る。(知識・理解)
- 学習の過程で分かったことや考えたことを、目的に応じた方法で表現することができる。(表現・技能)

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<b>1～4時限目</b> カンボジアってどんな国？① * 写真資料の読み取りを中心に、カンボジアについての内部情報を蓄積する。 * 天理の町との対比を行いながら、互いの発見や疑問点を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 食べ物、道路、お店、学校の4つのカテゴリーについてフォトランゲージを行い、分かった事・気づいた事・思った事を共有する。</li> <li>● 出てきた疑問点については、随時調べ学習を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 写真</li> <li>● 映像</li> <li>● グーグルアース</li> <li>● スマートノートブック</li> </ul>
<b>5～6時限目</b> カンボジアってどんな国？② * 一斉授業を通して、カンボジアの窮状(貧困、児童労働、孤児、失われた伝統、地雷)を知り、内部情報をさらに蓄積する。 * ここまで出てきた疑問について解答を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● グーグルアースで、カンボジアの基礎情報(日本との距離、地理、首都、街並み、人口、遺跡)を確認する。</li> <li>● 6つの実物資料を使って物ランゲージを行い、それが何に使う物かを予想させる。</li> <li>● 解答を発表しながら、それぞれの資料の裏にはカンボジアの窮状があることを教える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 実物資料6点               <ul style="list-style-type: none"> <li>①牛革の民芸品</li> <li>②口琴</li> <li>③ヤシ砂糖</li> <li>④クメール伝統織物</li> <li>⑤カンボジア産コショウ</li> <li>⑥蝶々型地雷模型</li> </ul> </li> <li>● スマートノートブック</li> </ul>
<b>7～10時限目</b> 問題を解決するための方法を考える * それぞれの意見をグループごとで話し合い、問題解決のための方法を集約する。 * 集約した意見を序列化し、自分の考えを整理する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● KJ法を用いて、それぞれの意見を小さなカードに書き、画用紙に貼らせていく。</li> <li>● 画用紙いっぱい意見が集まったところで、それぞれの意見をカテゴリーごとにまとめる。</li> <li>● カテゴリー分けを終えた後、どの解決方法がより大切かをランキングを通して考えさせる。</li> <li>● お互いのグループの意見を聞き合い、相違点について意見を交換する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 画用紙</li> <li>● 小さなカード(付箋)</li> <li>● マジック</li> </ul>
<b>11～12時限目</b> 持続可能な開発 ～世界とつながる日本～ * 一斉授業を通して、カンボジア国内における持続可能な開発の事例を知る。 * カンボジア国内で多くの日本人が活躍していることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● IKTT(伝統織物研究所)、クラタペッパーの事例を伝える。</li> <li>● 森本喜久男氏、倉田浩伸氏、中田厚仁氏の業績を、順に写真資料を提示しながら伝える。</li> <li>● 他に活躍している日本人がいないか、調べ学習を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 写真</li> <li>● スマートノートブック</li> </ul>
<b>13時限目</b> 蓄積した内部情報を整理する * ここまで学習内容を作文で振り返り、考えを整理する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 振り返りがしやすいように、学習内容を蓄積したノート、KJ法によって意見を集約した画用紙を活用しながら作文を書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 作文用紙</li> </ul>

**14～15 時限目**  
自分に出来る一歩を踏み出す

- \* カンボジアの孤児院への寄付及び手紙の交流を行う。
- \* 交流後感想を書かせる。

- 孤児院を支援している団体への寄付と手紙を送る方法を教える。

- 手紙用の画用紙
- 募金箱

### 3. 授業の詳細

#### 第1次：カンボジアってどんな国？①（4時間）

1～4時限で扱う写真資料を選ぶ際、次の2点に留意した。

- 出来るだけ身近な素材であり、3年生の社会科の学習とも関連性があること。
- カンボジアの負の側面には出来るだけ触れないようにすること。

その上で、「食べ物・道路・店・学校」を資料として選び、読み取りを行った。児童の反応は極めて楽しそうであり、初めて触れる異国の文化に興奮している様子であった。4時限目まで出てきた児童のカンボジアに対するイメージは、「自然がいっぱい」「運転が上手」「変わった食べ物を食べる」「貧しい」「人が優しく」などであり、偏った印象にはならなかったことが分かる。

また、身近な地域（天理市）と対比をする中で、「なぜ信号が少ないのか」「うどんは一杯いくらか」「買い物袋は使っているのか」「どんな勉強をするのか」等の疑問が児童からいくつも出てきた。それを調べるために、家で親と一緒にインターネット検索をしたり、図書館で調べる子も出てきた。それらを授業の中でもことさら強く褒め、調べ学習への興味を喚起できるようにした。

#### 第2次：カンボジアってどんな国？②（2時間）

ここまであえてほとんど触れなかったカンボジアの窮状を、一斉授業を通して伝えた。

6つの実物資料を提示し、それが何なのかをグループ毎で相談し、予想させた。それぞれの物は「貧困」「児童労働」「孤児」「失われた伝統」「地雷」などの諸問題と深くかかわっている。授業の後半でそれらの解説を行い、根底には「戦争」が大きな原因の1つであることを伝えた。それまで楽しそうに授業に取り組んでいた子どもたちは、水を打ったように静かになり深刻な表情で話を聞いていた。

#### 第3次：問題を解決するための方法を考える（4時間）

第2次で扱った問題について、解決方法を考えさせた。KJ法を用いて意見を列挙・分類し、さらにどの方法がより大切かを考えさせるためにランキングを行った。児童は、自分の考える方法の中でどれが最も重要かを考え、順位付けを行いながら考えを整理した。出てきた主な意見としては、「募金をする」「技術をもった人をカンボジアに送る」「里親として子どもをあずかる」「地雷を全て撤去する」などが挙げられた。



**第 4 次：持続可能な開発～世界とつながる日本～** (2 時間)**第 5 次：蓄積した内部情報を整理する** (1 時間)

児童から出てきた解決方法について、すでに様々なプロジェクトや支援を行っている人々がいることを一斉授業によって伝えた。中でも、特に森本喜久男氏による「伝統織物研究所」の事例を詳しく取り上げ、「持続可能な開発」についても初めて取り上げた。

また、決して一方通行の支援ではなく、カンボジアの人も日本を応援・支援してくれていることを、東日本大震災の際の様子を交えて伝えた。この後に書かせた作文では、異国で活躍する日本人の姿や、震災に対してカンボジアの方々が祈りしてくれている姿に感動した旨を書いている児童が多数いた。

**第 6 次：自分に出来る一步を踏み出す** (2 時間)

ここまでの学習を通して「自分にもできる事がしたい」という熱が児童の間で高まってきた。そこで、実際にカンボジアの孤児院への寄付及び支援を行い、さらに手紙を通して子ども同士の交流を行うことにした。

「NPO 法人 make the heaven カンボジアプロジェクト」という団体を介して、孤児院で勤めている現地スタッフの方とメールで連絡を取り合い、寄付及び交流について了解を得た。その際メールでの問い合わせ方法や文面の作成の仕方も授業で扱い、実際に送信する時はパソコン画面をスクリーンに写し、児童の目の前でメールを送った。

児童は寄付や手紙だけでなく、折り紙や絵、日本の遊び道具、さらにクメール語で自己紹介をしている映像を作って送ることを発案する等、極めて意欲的に学習に取り組んだ。12 月の末にそれらをまとめて送り、3 学期には孤児院から手紙や写真が届くことになっている。

**4. 成果と課題**

「貧困」や「孤児」などの言葉を、作文や会話の中で児童が使いこなせるようになった点や、実際に現地の子どもたちと交流するツールを発見できたことは大きな成果であった。

課題としては、今回の実践が持続可能なものであったかどうかには尽きる。今回の学習が今後にも何らかの形で持続し生かされていくのかがどうか、経過をしっかりと観察したい。また、資料の吟味の仕方、コンテンツの作り方、指示・発問の中身などについても精査をし、次年度以降の実践をより良いものにできるよう努めていきたい。

**参考文献・資料** 現地で撮影した写真資料及び映像資料

- 「カンボジアを知るための 60 章」 上田広美編著 明石書店 2006 年
- 「子どもたちに寄り添う」 工藤律子著 JURA ブックレット 2008 年
- 「江戸・キューバに学ぶ真の持続型社会」 内藤耕他著 B & T ブックス 2009 年
- 「ゴミ山に生きる子どもたち」 佐々木健二著 星雲社 2011 年
- 「世界から貧しさをなくす 30 の方法」 田中優著 合同出版 2006 年
- 「カンボジア絹緋の世界 アンコールの森に蘇る村」 森本喜久男著 NHK 2008 年
- 地雷模型 12 点セット (CMC「カンボジア地雷キャンペーン」より購入)
- 口琴、カンボジア産コショウ、牛革の民芸品、クメール伝統織物、ヤシ砂糖